

令和のオピニオン⑨

新型コロナウイルス感染拡大で なすべきこと

麗澤大学教授
川上和久



昭和32年生まれ。東京大学大学院社会学研究科博士課程単位取得退学。東海大学、明治学院大学、国際医療福祉大学を経て令和2年4月より現職。専門は政治心理学、戦略コミュニケーション論。主要著書に『情報操作のトリック』（講談社現代新書）、『反日プロパガンダの読み解き方』（PHP研究所）等。育鵬社中学教科書『新しいみんなの公民』編集座長。吉本興業経営アドバイザー委員会座長。一般財団法人青少年国際交流推進センター理事（前・理事長）。

一党独裁の情報統制と自己中心主義の愚

令和二（二〇二〇）年初頭から始まった新型コロナウイルスの世界への蔓延は、大きな災厄をもたらしているが、元凶である中国の「一党独裁」による情報統制が、初期の感染拡大防止の機会を奪ったことは間違いない。発生地である武漢で新型コロナウイルスによる肺炎に警鐘を鳴らした医師がいたにもかかわらず、情報を隠蔽した結果、正式発表が遅れ、春節で多くの中国人が海外に出かけて世界中に感染が拡大した。

中国の責任は重いが、責任を認めるどころか、むしろ、「米軍が新型コロナウイルスを持ち込んだ可能性がある」と政府高官がツイッターに投稿、情報戦を仕掛けるなど、「言った者勝ち」で歴史の記憶の改竄を図っている。



中国外務省の趙立堅副報道局長（共同通信）

一方で、一党独裁による強制力で感染拡大を抑え込もうとした強引な手法は、民主主義国家では難しいという指摘もなされている。

だが、新型コロナウイルスの惨禍を世界同様に蒙ったわが国の国民レベルでの対応を見ると、暗澹たる思いを禁じ得ない人たちが少なからずいるのではなからうか。

マスクが不足している中で、ネット上のフリーマーケットで高値でマスクを転売して儲けようとするさもしい輩。マスクが必需品である医療従事者にまでマスクが行き渡らない危機的状況の足元を見るような行為だ。公職にある県議会議員までもが、マスクをネット上のフリーマーケットで販売して問題となった。

「トイレットペーパーがなくなる」というネット上でのフェイクニュースに惑わされ、開店前からトイレットペーパーを入手するために列をなす人たち。不安に駆られる気持ちは分かるが、フェイクニュースを鵜呑みにして拡散する「民度」も問われる。

一部の者の軽率な行為とはいえ、不要不急の外出自粛が要請されているにもかかわらず、キャンセル料がかかるからもったいない、自分たちがかかって無症状か症状は軽いから、という理由で感染拡大真つ最中のヨーロッパに旅行に出かけ、帰国後、会合などに出てクラスター感染を引き起こした学生たち。京都産業大学、県立広島大学等でこういった事例が発表され、その自分本位の軽率な行動は批判されて然るべきだが、ネット上で当該学生の実名や住所などのプライバシーを探り出して晒そうという「歪んだ正義感」も眉をひそめなくなる状況だ。

近代合理主義の病理と上杉鷹山公の仁政

こういった、新型コロナウイルスのパンデミックに伴う中国の自国中心主義、日本でも見られた自己中心主義は、一党独裁の病理であると同時に、「自分中心」「自分さえよければ」という近代合理主義の病理であるようにも思えてならない。それに対する処方箋はないのだろうか？



鷹山公の治世で
は、内村鑑三の言

政治の混迷、個人主義の蔓延を目にするにつけ、私が思いをいたす一人の人物がいる。江戸時代の米沢藩主・上杉治憲(鷹山)（一七五〇〜一八三三）だ。

上杉鷹山は、内村鑑三が明治四十一（一九〇八）年に英語で出版した『代表的日本人』で、西郷隆盛、二宮尊徳、中江藤樹、日蓮上人と並んで取り上げ、米国のケネディ大統領が、理想の政治家として鷹山公を挙げたことでも知られる。

私の曾祖母は山形県米沢市の出身で、八王子で祖父母と同居しており、私が中学一年のときに九十六歳で大往生したが、曾祖母の部屋には小さなお像があつて毎日拜んでいたの、「この人だれ？」と聞いたら、「米沢の立派なお殿様で、上杉鷹山公じゃよ」と教えてくれた。

昭和四十五（一九七〇）年に私が麻布中学に合格し、通うことになったとき、「あそこは鷹山公が幼少の頃住んでおられた秋月藩の藩邸だったところだ、いいところに通うね。冥途の土産ができた」とたいそう喜ばれた。

曾祖母は鷹山公の遺徳を没後五十年以上を経てその両親から繰り返し教えられるのだらう。

葉を借りれば、「産業改革の目的の中心に、家臣を

有徳な人間に育てること」を置いた。農民への教え「五十組合の令」でも、「互いに怠らずに親切をつくせ」「善を勧め、悪を戒め、儉約を推進し、贅沢をつつしめ、そうして天職に精励させることが、組合を作らせる目的である」と有徳を説いている。

有徳の涵養のため、閉鎖されていた藩校を再興、謙譲の徳を振興する意で「興讓館」と名付けた。自らは一汁一菜を貫き、ひたすら領民の幸福のため、行財政改革、灌漑事業、産業振興、有徳教育の充実に一生を捧げた。武士は民に、自らの食べ物を分け与えてまで民を安んじるといふ、武士道の一つの昇華された美徳がそこにあった。

「棒杭の商い」もあまりに有名だ。人里離れたところに商品を置き、値札があるが、誰一人盗もうとする者はなく、皆が商品の代金をそこに置いていったという。

一党独裁でも、過度の自己中心主義に墮した民主主義でも成し得ない理想の仁政がそこにある。わが国は近代合理主義を超越し、新型コロナ禍を乗り越える中で、あらためて「有徳の世」をつくらねばならない。

私は育鵬社の中学校公民教科書『新しいみんなの公民』で編集座長を務めている。今年度が採択戦となるが、鷹山公の没後二百年近くを経た中でも、その精神を教科書の中に込めさせてほしい。ぜひ「有徳の人材」を数多く世に送り出したいと思っている。

「有徳の世」をめざす

新型コロナ禍の中、友人が少し希望の持てる話をしてくれた。友人が息子にモラルを欠いた利潤追求の非、武士の精神こそが商売には大切、と話したところ、家からトイレットパーパーが九個なくなり、息子に聞いたら「お父さん、当家には備蓄は十分にあるが、地方から来ている大学の同級生で困っている人が三人いたため、実は一人に三個ずつあげたんだよ」と言ったという。

後日息子の友達のご実家より、丁重な御礼の手紙と返礼品をいただき、かえって恐縮してしまつたそうだ。

今回の騒動に乗じて儲けようとする輩、フェイクニュースを垂れ流す輩、感染の危険がある海外に出かけて感染を拡大させる輩がいる中で、「良貨が悪貨を駆逐する」積み重ねができそうな清々しい話だ。

私の専門領域は政治心理学で「世論研究」だ。今回の新型コロナ禍は、一党独裁の欺瞞と個人主義のあさましさを如実に見せつけたが、同時に、ピンチはチャンス、近代合理主義の中でわが国がともすれば見失いがちだった、武士道精神の称揚による「有徳の世」が、社会の結びつきや経済効率も活性化させるのではないか、という世論をつくっていく契機をつくりたいと思っている。

参考文献

内村鑑三著・鈴木範久訳『代表的日本人』岩波文庫（一九九五年）